

# ヘミングウェイに見る生と死なるもの

On the extensive Life and Death seen on Hemingway.

大 森 孝

## 序

アメリカ文学を世界文学の領域に於て、展開させるアクションをなし、そして、二十世紀の運命に、体当りのに直面し、その現実と対決し、終に散って行ったノーベル賞作家、ヘミングウェイの中で、絶えず遍歴し、対決を迫る「生と死なるもの」を、彼及び彼の代表的作品を通して、少しく考究して見ようと思ふ。

.....

アメリカ中西部シカゴ近郊、オークパークの狩猟好きの医者の子として生れたヘミングウェイは、生来野外運動に、強い関心を示した。彼は競争心の強い孤独な少年であった。

第一次大戦がおこり、兵役志願をしたが、眼の故障の為、入隊を拒否された。それで、The Kansas City Star 紙記者となった。翌年、赤十字野戦病院の運転手となって、欧州戦線に赴いた。彼は戦争と云ふ未知なるものへ、自己を投入して行ったのである。

一九一八年七月夜の出来事はヘミングウェイにとって、最初のショックであった。当時、彼は北イタリアのピアヴェ前線に居た。そこに、オーストリア軍の迫撃砲弾が、落下し炸裂した。彼は、その時、一時意識不明であった。彼は、意識を取戻すと、うめいて居る一人をかついで、壕に戻った、サーチライトが追いかけて、重機が掃射した、足を射たれ、壕に這い

こんで倒れた。背中の男は死んで居た。其後彼は、ミラン陸軍病院に入院して居たが、完全に回復せず、翌春、びっこをひいて、オーク・パークに帰った。以来、彼の神経は、変調を来し、不眠に苦しむ様になった。そして、恐怖神経が昂進して来た。此の夜の出来事は、彼の思考と、行動を決定づける結果となり、彼の文学に重大な関係を持つのである。以来彼は、「病める魂」として、登場するのであるが、同時に、清潔な明るい場所を求めて、恐怖から脱却しようとする宿命を負はされるのである。そして、脱却しようとしても、世男は宿命の為に、設定されて居り、脱却出来ない事になって居ると考え、こゝで、彼は行動と忍耐力によって自己の健全を、信じようとするのである。考える事は「病む」事であり、考えない事、即ち、一番単純な事柄は「死」である。然もそれは、一瞬の横死であり、自然死ではないのである。

此の現実と対決する事により、自己の生を確かめるのである。その結果彼の「文学」は、「行動的」となって来るのである。

彼は、「トロント・デイリ・スター」[スター・ウイクリ]の、欧州特派員として、本国を離れ巴里居住の、所謂「国籍抛棄者」の群に入った。ガートルウド・スタインの所に、出入し、巴里在住の、文学仲間と交際した。この一群の若い世代を、スタインは、「失われた世代」(Lost Generation)と呼んだ。彼等は、戦後の廢墟の中に立ち、廢墟なり、絶望なりを、そのまま直視し、古きもの、前近代的アメリカを見すて、精神の新生を求めたのである。

猶、ケイジンは、ロスト・ジェネレーションについて、次の如く述べて居る。

It was a fateful loss and Perhaps a willing loss, no tragedy for them there, but it was a part of the conviction by which they wrote and experienced the world, as with different senses, which

gave them so epic a self-consciousness.

—A. Kazin: On Native Grounds. P 255

希土戦争が始まると、彼は、小アジア迄行った。そこで又戦争の、悲惨な光景に接したのである。

一九二五年、「春の奔流」(The Torrents of Spring)が脱稿した。この作品は、それ程フェーマスではないが、意義は大である。即ち彼の旧世代、即ち「当時の有名作家アングスンと、感傷の原始性を持つ、アングスン商標からの、独立宣言を、意味して居るからである。」

「春の奔流」(The Torrents of Spring)といふ<sup>②</sup>題名は、ツルゲーネフ「春の水」からの暗示を受けて居ると、思はれる。彼は、ツルゲーネフの、愛読者であった。筋を少しく述べて見ると、「春の奔流」とは、作品に登場する二人の人物、スクリツプスオニール(Scrips O'Neil)とヨウギ、ジョンソン(Yogi Johnson)の血管にながれる、流れの意味である。オニールは、ミシガン州、ベトスキイに流れて来た男。ジョンソンは土地の靴工場に、働いてゐる帰還兵、第一次大戦直後である。チヌークといふ暖風が、吹き始めると、ミシガン湖畔の雪が解け、二人の男は、何か落着かず、昔を回想する。オニールはマンスロウナで、最初の妻に逃げられ、ブラウン安食堂で知り合った年上の女給ダイアナと、結婚したばかり。ところが、彼の心は、年下の女給マンデイに傾くのである。マンデイは、文学少女で、オニールと話が合ふ。或る寒い夜、ダイアナは、二人を残して、安食堂から抜出して行く。最初に、ヨウギが現はれる、戦争から帰ったばかりの彼は、虚無的であり、自殺を考えたりするが、後に夜中の路を、一つ一つ衣物を、脱ぎながら、歩いて行く、その後を、二人の森林地のインディアンが、其等の衣物を拾いながらついて行く……。

つまりこの作品は、ヘミングウェイが「死と生」をくぐり、二十世紀の運命を、まともに望まうとする挑戦の書である。その挑戦とは旧倫理への

挑戦だったのみならず、二十世紀の運命そのもののえの挑戦と言えるのである。

③

彼を一躍有名にした作品は、「陽はまた昇る」(The Sun Also rises) 1926である。

全篇が三部に分れ、第一部は、第一次大戦後の巴里である。そこでは、「ロスト・チエネレーション」の群の、無為と、放蕩の風景が、展開される。第二部の場面は、巴里から、スペインへと移る。第三部は結末であるが、此の物語は、ジェイク・パズが主役となって、進展する。彼は、戦傷を受け、性的不能者である。「設定された世界」の不幸を、まともに受けた様な男である。ヘミングウェイの人生観が、このジェイクを通して見られるのである。此の作品は、半面は、虚無の陰影を、帯びると同時に半面は、躍動の気が充ちて居り、「死なるもの」と「生なるもの」の両面が、相照的に見られるのである。そして、生の象徴とも言える「闘牛」の場面、即ち牛と一つになって躍動するロメロを見るのである。

一節を述べるならば、

「彼は牛の前でまともに斜になった。ミュレタ(赤布)の巻きこみから剣を抜き、剣身に、ずうと目をくれた。牛は彼をながめた。ロメロは、牛に話しかけ、片足をばたばた叩いた。牛はおそいかかった、ロメロは、攻撃を待っていたのだ。剣身に目をやりながら、足をしっかりとつけながら、ミュレタを低く支えた。それから、一步もふみこまず、彼は牛と、一つになっていた。剣は牛の肩の間に高く上げられ、牛は低く旋回するフランネルの布を、追った。それは消えた。ロメロは、左手に身をかわした。それで終わった。

He profiled directly in front of the bull. drew the sword out of the folds of the muleta and sighted along the blade. The bull watched him. Romero spoke to the bull and tapped one of his feet.

The bull charged and Romero waited for the charge, the muleta held low, sighting along the blade, his feet firm. Then without taking a step forward, he became one with the bull, the sword was in high between the shoulders, the bull had followed the low-swung flannel, that disappeared as Romero lurched clear to the left, and it was over.

他の面である「死なるもの」虚無の陰影を、次の如き場面に、見るのである。

其れは、ジエイクの「結ばれない恋」を恋する空しさであり、又其の仲間のコーンの失恋であり、彼等の恋人であるプレットの、男から、男へと移り行く不安定な姿である。彼女は常に、「不信」と「空虚」の中を、彷徨して居り、其の背後に戦争と、其れから来る虚無とが、横たはって居たのである。

「武器よさらば」(A Farewell to Arms, 1929)に於ける、「ヘンリ」と「キヤサリン」の恋愛は、戦争と虚無感を、くぐらねばならない点に、重要な意義がある。又此は二十世紀の運命であり、その運命を、運命として生きなければならなかつたのである。象徴的手法として幸福は「山地」が代表し、不幸なるものは「平地」が代表して居ると言える。所謂「生なるもの」は「山」に、「死なるもの」は「平地」に見るのである。作者が「ヘンリ」を通して、山を見た文の一節を次に述べるならば、

I looked to the north at the two ranges of mountains, green and dark to the snow-line and then white and lovely in the sun. Then, as the road mounted along the ridge, I saw a third range of mountains. that looked chalky white and furrowed, with strange planes, and then there were mountains far off beyond

all these, that you could hardly tell if you really saw. —Chap.8

然し、此の作品の主流をなすものは、「死なるもの」である。常に不意と、死の幻影に、おびえるキヤサリンである。

「ねえ、いつも私を愛してくれる」

「あゝ」

「雨が降っても変らない」

「あゝ」

「あゝよかった。だって私雨がこわいの」

‘And you’ll always love me, won’t you?’

‘Yes.’

‘And the rain won’t make any difference?’

‘No.’

‘That’s good. Because I’m afraid of the rain.’ —Chap.19

何故に雨が恐いのであらうか。其れは、人間の運命に対する恐怖であり結局死に結びつくものであらう。

スイスに脱出して、落着いたと思ふとすぐ、キヤサリンは、死児を産み自分もその為、死んでしまった。

キヤサリンの死に対する。恋人ヘンリーの言葉は、次の如くである。

「これで、キヤサリンも死んでしまった。それが、人間の常なのだ。人間は死ぬのだ。死とは、どういふことか。誰も知らないのだ。習い覚える暇もないのだ。しかし、結局皆殺されるのだ。其れだけは確かだ。うろろうして居ると、きっと殺される。」

Now Catherine would die. That was what you did. You died. You did not know what it was about. You never had time to learn.…… But they killed you in the end. You could count on that. Stay around and they would kill you. —Chap. 41

この死、これは「二十世紀の運命」を象徴するのであらう。ヘミングウェイに取って二十世紀は、一つの悲劇であったのである。

「誰がために鐘は鳴る」(For Whom the Bell Tolls, 1940) は、出版後直ちにベストセラーとなり、ヘミングウェイの声望を、再確立した。全四十三章からなり、四日間の出来事を、見事な長篇として書き上げた。此の作品で、彼は回想的手法を用いて、過去の風景を説明し、心理的手法を駆使して、充分効果を上げてゐる。

少しく筋を追ふならば、

主人公ロバート・ジョーダン (Robert Jordan) は、アメリカの青年で、一九三六—三七年に至る一ケ年間、動乱のスペインに渡った。そこで共和政府の義勇軍に参加して、ゲリラ活動を開始する。三七年五月、彼は特務機関長ゴルス (Golys) から、橋梁爆破の命令を受け、共和政府軍に味方するゲリラ隊の山塞を訪ねて来る。ジョーダンの道案内をするのは、パブロ (Pablo) 親分一味の老人、アンゼルモ (Anselmo) である。パブロ一味は、ある山腹の洞穴に居住していた。ここで、ジョーダンの前に現はれるのは、十九才のスペイン女マリーア (Maria) である。彼女の父は共和党だった為、ファシストに殺された。彼女は凌辱され、監獄に投じられ、南方に汽車で、輸送される途中、その汽車を襲ったパブロ一隊に救出されて、山の中に来て居るのである。

昔は思い切った行動をしたパブロも、今は臆病になって居る。といふのは、ジョーダンに加担して、下手に橋梁爆破をやるなら、早晚ファシストの掃蕩を受けて、自己の保持する山塞を追われる心配が有るからである。そこで、ジョーダンは、老人アンゼルモを伴って橋梁爆破の計画をする。しかし物語の発展は、そう云ふ目的遂行にあるよりも、其れを背景としての、ジョーダンと、スペイン美人マリーアとの恋愛関係にある。

「第二日」は、親分サンチャゴに援助を求めに行った帰り、高原のヒース

と、山頂の雪を背景にしての、爽快な恋愛風景が、両び、ジョーダンとマリーアの間、展開される。

「第三日」は、戦闘の描写である。

「第四日」は、急使アンドレの行動と、橋梁爆破にとりかゝるジョーダン一行の、活動が、並行して語られる。ジョーダンは、橋梁に到着し、哨兵をやっつけて、爆破装置に、とりかかった。この爆破の煽りを食って、老人アンゼルモが即死した。パブロも、敵のタンクの攻撃により、命からがら逃げて来た。ジョーダンは、左脚に命中弾を食い、行動の自由を、失ってしまふ。そして、恋人マリーアの、「あたしも残る……」と云ふ言葉を振り切る様に、彼女を、他の仲間達に頼んで、連れ去らせる。そこで、ジョーダンは、勇気を、振りおこして、「もし我々が、こゝで勝利を占めるなら、我々は、到る処で、勝利を得るだらう」(If we win here we will win everywhere.)と云ふ信念により、生命にかけて、敵の出現を待つために、不自由な体で止まるのである。

「誰がために鐘は鳴る」の、其の鐘とは、死の予徴の鐘の音である。其の鐘の音は、死が人間共通の運命である以上、何人の上にも鳴りひゞくのである。個人の運命が、人間全体の運命に結びつく「暗い予徴」を、知るのである。又其れが、二十世紀の現実であった事にヘミングウェイは、心打たれたのである。こゝに、「死なるもの」を見るのである。

「もし、我々が、こゝで勝利を、占めるなら、我々は、到る処で、勝利を得るだらう。」と云ふ言葉は、暗い運命の中で、ひたすら生きようとする、尊い生命の、目覚めを、予告して居るのであり、こゝに、「生なるもの」への、憧れを見るのである。そして、ジョーダンのマリーアに対する愛は、明るい清潔なものを、常に求めながら生きようとする人間性を、現はして居り、こゝに又、「生なるもの」を見るのである。

最後に、彼の最近の傑作である「老人と海」(The Old Man and



The Sea) について述べるならば、此の作品は、一九五二年九月、「ライフ」誌に、全篇が発表された。次に少しく筋を追ふならば、主人公は、キューバの漁夫サンチャゴ (Santiago) で、メキシコ湾流に小舟を浮かべ、魚を取って居る。八十四日も不漁が続き、彼と共に居た少年マノーリン (Manolin) も、両親のいっつけて、他の舟に移ったほどだ。老人は妻を失い、海辺の小屋で孤独に、暮して居る。少年は、老人に心服して居り共に野球の話をしたりして楽しむ。老人は、ヤンキースのデイマチオの尊敬者である。又老人は青年時代、アフリカ通いの船に乗って居り、その当時海岸で、たわむれていたライオンを思い出し、なつかしむのである。

出漁した老人は、一匹のマーリン (Marlin) を針にひっかけた。非常に重く、ボートは、マーリンにひっぱられたまゝ、海をすべって行く。その為、九月の夜を、魚と張合って過した。それから四日間、マーリンとの戦いは、続くのであるが、終りに、血の匂いをかいだ鯊が、出て来て、そのマーリンを食いあらし、港に着いた時は白い骸骨だけになってゐた。小屋に帰った老人は、ライオンの夢を見て眠った。

此の作品に於て、作者の意図は、老人サンチャゴを通して見られるのであり、あらゆる現実を、貫き生きようとする再生の氣に溢れて居るのである。そして、老人の行動を、規定する現実こそ、老人の最も愛するものであった。老人にとって、最大の現実は、海にあった。それ故、その現実の海を、限りなく愛した。海について作者は次の様に述べている。

「常に海の中に生きているものは、永遠の価値を持つ。なぜなら、インディアンも、スペイン人も、英国人も、すべてのキューバ人も、すべての政府の組織も、富も貧も、苦惱も、犠牲も、慾得も、殘虐も、それらすべてが、消えてからも、海は、同じ様に動いて居るからだ。」

(Those that have always lived in the sea are permanent and value because that will flow, as it has flowed, after the Indians,

after the Spaniards, after the British, after the Americans and after all the Cubans and all the systems of governments, the richness, the poverty, the martyrdom the sacrifice and the venality and the cruelty are all gone…… Part 11 Chap. Eight)

老人は此の生なる海、現実の海を愛した以上、その中に生存する凡てを、愛した。それ故彼は魚を愛した。しかし愛する魚を殺した。愛するものを、愛する故に殺す。何故であらうか。其れは、人間生存の真実を、確認する為である。愛といふものは、彼に取って、それ程、真剣なものであった。魚を殺した事は、老人が、生命をかけて、魚を愛していたからである。

こゝに、「死なるもの」が、「生なるもの」と一体化して居るのを見るのである。

以上彼の代表的作品について、「死及び生なるもの」が如何なる姿に於て、現はれて居たか、少しく解明した次第であるが、二十世紀の運命に、作家の魂をを、ぶっつけ、くだき、そして、散って行ったヘミングウェイは、その追求する主題が「二十世紀人の運命」に、結びつく限り、因は相違していても、もはや、他人事とは言えないのである。 37・8・15

#### 註

- ① One of the simplest things and the most fundamental is violent death. —Death in the Afternoon, Chap.1.
- ② This one goes on declaring its author's independence of his old friend Anderson, and of the whole Anderson brand of sentimental primitivism.—Ph. Young: E. Hemingway, P.55.
- ③ ヘミングウェイ研究 石一郎著、南雲堂 38頁
- ④ 上に同じ 57頁

参考文献

- James D. Hart : The Oxford Companion to American Literature, New York, Tokyo, 1956  
 Calverton, V. F : The Liberation of American Literature, New York, 1922  
 Ph. Young : E. Hemingway. New York, 1952  
 Malcolm Cowley : Hemingway, The Viking Press, N. Y. 1944  
 Frederick J. Hoffman : The Modern Novel in American Literature, Chicago. 1951  
 John Atkins : The Art of Ernest Hemingway. London. 1952
- Japanese Books.
- Masaru, Siga : The growth of American Literature, Kenkyu-sha. Tokyo. 1956  
 Itiro, Isi : The study of Hemingway. Naundo, Tokyo. 1960  
 Gen. Sakuma : The study of American Novel. Tokyo. 1934

筆者紹介

林	大	堀	町	猪	秋	長	望	里	上	室	松
	森		田	俣	山	谷	月	見	田	住	木
是		一	是	康	智	川	海	泰	本	一	本
幹	孝	勇	正	光	孝	義	淑	穩	昌	妙	興
教授(宗門史)	講師(英語)	講師(歴史学)	講師(歴史学)	図書館司書	助教授(宗教学)	講師(仏教学)	講師(梵語)	教授(仏教学)	講師(宗学)	教授(宗学)	本学々頭・教授(天台学)